

# 東京2020大会に向けた サイバーセキュリティの準備

平成28年4月27日

公益財団法人 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会  
テクノロジーサービス局長 舘 剛司

# 自己紹介

舘 剛司(たち たけし)

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

テクノロジーサービス局 局長

略歴:

1989年、大阪大学大学院・修士課程修了。同年、日本電信電話株式会社(NTT)入社。

映像伝送システム・次世代IPネットワークの開発、サイバーセキュリティ分野の研究開発戦略の策定などに従事。米国カリフォルニア大学バークレー校 経営工学・修士課程修了。

2013年より、米国のR&D子会社(NTT Innovation Institute, Inc.)設立とサイバーセキュリティ分野のR&Dプロジェクトに従事。

2014年より組織委員会へ出向し、東京2020大会の運営や準備活動に必要なネットワーク・情報システムなど技術全般に関する計画策定、開発、運用、サポートなどを統括。

# 本日のアジェンダ

1. 東京2020大会に際して想定するリスク
2. 大会を守るとは？
3. 組織委員会のアプローチ
4. IoT時代のサイバーセキュリティ人材

# 1. 東京2020大会に際して想定するリスク



# 大会用システム・ネットワークの概要 (London 2012の場合)

## スタッフ

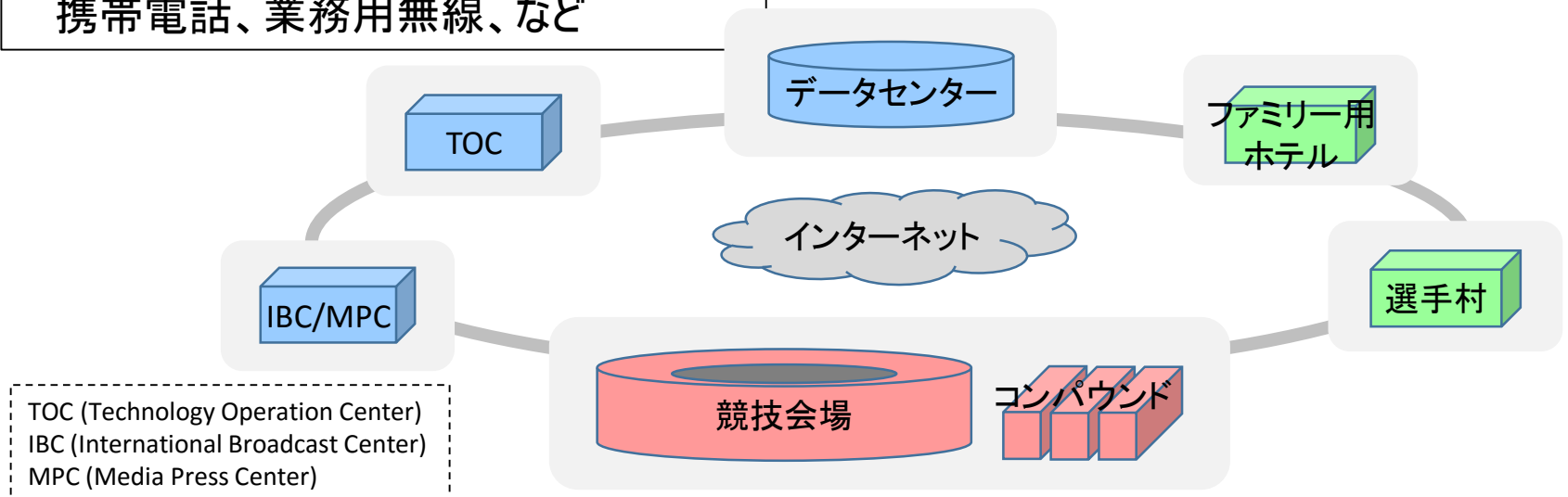
- 組織委員会スタッフ 8,000名 / その他大会運営に関わったスタッフ 70,000名

## ネットワーク

- 国内100以上のロケにまたがる大会用ネットワーク
- 提供された通信サービス: Eメール、インターネット、ビデオ/Web会議、IP電話、携帯電話、業務用無線、など

## 情報システム

- 発行された認証カード 25,000名分
- オリンピック26競技302種目、パラリンピック20競技503種目の競技結果をリアルタイムに放送局・メディアに提供
- 競技スケジュール、天候、輸送などに関わる情報を、14,700人のアスリートに提供



# London 2012におけるサイバーセキュリティ

“大会公式サイトには、2週間の開催期間で2億2,100万のサイバー攻撃”

“7月26日（開会式前日）に、東欧のハッカー集団が大会のITインフラに対して数10分間に渡って脆弱性を探すためのスキャンをかけてきた。”

“7月26日（開会式当日）に電力システムを狙った攻撃の情報を受け、多くの技術者を要所ごとに配置するマニュアル操作に切り替えた。”

“同日午後5時には、（大会公式サイトへの）DDoS攻撃がピークに達し、北米および欧州の90のIPアドレスから1千万リクエストのDDoS攻撃が40分間にわたって続いた。”

“8月3日（大会終了間近）には、一秒あたり30万パケットのDDoS攻撃が同じIPアドレスから送られてきた。このアドレスはプレス向けに用意され共同利用されていたもの。”

【出典】 “London 2012 prepares for cyber-attacks” (The Guardian, Apr 4, 2012)  
<http://www.theguardian.com/sport/2012/apr/04/london-2012-prepares-cyber-attacks>  
“The 'cyber-attack' threat to London's Olympic ceremony” (BBC, Jul 8, 2013)  
<http://www.bbc.co.uk/news/uk-23195283>  
“How the London Olympics dealt with six major cyber attacks” (Computing, Mar 6, 2013)  
<http://www.computing.co.uk/ctg/news/2252841/how-the-london-olympics-dealt-with-six-major-cyber-attacks>

# 過去大会でも想定されていたリスク(例)

分類	項目	備考
金銭目的のサイバー犯罪	偽チケット販売サイト	国内だけでなく海外でも想定される
	フィッシング、偽サイト、偽アクセスポイントなどによる個人情報の搾取	
	ランサムウェアによる脅迫	
ハクティビストの攻撃	大会サイトへの攻撃(DoS攻撃、改ざん)	大会に関するメディア報道、国の記念日、ネガティブ・キャンペーン、関連イベント開催などがきっかけ
	スポンサーや開催都市など関連サイトへの攻撃	周辺サイトがとばっちりを受けやすい
	競技対戦国の関連サイトへの攻撃	近年のスポーツイベントにつきもの
サイバーテロ	大会システムへの侵入によるシステム破壊、データ破壊	狙われるかどうかは、大会開催時の国内外の情勢に依存
	大会システムの乗っ取り	
	重要インフラへのサイバー攻撃	
サイバー戦争	要人を狙ったサイバースパイ	海外要人も多数来訪するため

# 2020年に向けたスポーツ・テクノロジーの動向

【出典】 “ascent, a vision for sport and technology,” (Atos SE (Societas Europaea))

<http://atos.net/content/dam/global/olympic-games/atos-ascent-vision-sport-and-technology-2013.pdf>

Atos Scientific Communityが注目する5つの動向：

1. リアルタイムでのデータ利用
  - ・ パターンが形成されている最中でも、それを特定し反応する技術
2. ソーシャルネットワークの標準化
  - ・ ビッグプレイヤーによる独占的エコシステムから、より多様なネットワークがオープンに連携する環境への移行
3. カスタマイズされた視聴体験
  - ・ 個人の嗜好にあわせたショー、イベント、カメラ視野、コメントスタイルなどを提供するパーソナルTVチャンネル
4. 新しいセキュリティ情報源
  - ・ ソーシャル分析、音声認識・顔認識、ロボット警官、ロボットカメラ、クラウドソーシング…
5. テクノスポーツ
  - ・ 競技ビデオゲーム、仮想スポーツリーグ、ロボット競技…



# 東京2020大会で想定される環境の変化

- ✓ システム設計・構築において、「サイバー・セキュリティの要件」は最も予測が難しい不確定要素になりつつあります。

## 大会システム・放送システムの進化

- インターネットやクラウドへの依存度の増加
- 放送システムにおけるIP技術の採用拡大

## 社会全体のますますのIT化

- モバイル端末やSNSの進化・普及による、ロンドン大会より桁違いに大きい通信トラフィック
- スポーツイベントの世界でも、ネットワークにつながるもの(IoT)が急激に増加

## 国際情勢の変化

- サイバーテロやサイバー戦争に巻き込まれるリスク

## 関係機関どうしの連携の重要性

- リスクの広域化・複雑化に伴い、ひとつの組織・機関に閉じてできる対策には限界

## 2. 大会を守るとは？



# オリンピックを守るとは？

『オリンピックにおける最大のリスクとは、結局はレピュテーションリスクに尽きるだろう。』

(Mr. Oliver Hoare, ロンドン大会における英国内務省所属の大会全体のセキュリティ責任者)

① 大会ブランドや社会的責任  
に与える影響

- オリンピック憲章でうたう根本原則に反しない。
- オリンピック・ムーブメントを具現化する。
- パラリンピックについても同様に重視する。

② ステークホルダに与える影響

- ステークホルダ(放送局、競技団体など)に迷惑をかけない。
- 円滑に大会を運営する。

③ 事業(ビジネス)上の影響

- 赤字を出さない／法律を守る／けが人・病人を出さない／サステナビリティに則う／レガシーを残す

(注)本ページの記載内容は、サイバーセキュリティ対策検討用の仮評価結果であり、実際の評価と異なる可能性があります。

# 守るべき対象は？

想定リスクの全体像

## 3. 社会全般の観点

## 2. パートナ・周辺環境の観点

## 1. 大会運営の観点

### 1. 組織委員会の所管範囲内で、大会運営に直接影響するもの

(例. 大会システムへのハッキング／内部情報漏えい／予算不足に伴う運用レベルの低下／ドーピング・コントロール・システム)

「狙われやすい」「対策が漏れやすい」のは、むしろ大会システムの周辺環境や日本社会のインフラ、関連企業のサイトなどである。

### 3. 間接的に大会への影響が懸念されるもの

(例. 社会基盤に対するテロ・サイバーテロ／SNS上での日本・東京に対する評価・評判／RUGBY 2019へのテロ／自然災害／パンデミック)

### 2. パートナや周辺環境の問題で、大会への影響が大きいもの

(例. サプライチェーン内在リスク／偽チケット販売サイト／重要インフラの障害・停止／会場周辺でのパニック／レピュテーション低下による参加国のボイコット)

# 大会成功に向けて社会が抱える課題

- ✓ 日本の通信環境(インターネット、公衆WiFiなど)の課題 ⇒対策徹底の難しさ
- ✓ モバイルトラヒックの急増に伴う課題 ⇒トレンドを読む難しさ
- ✓ ネットワークにつながるモノ(IoT)が急激に増加していることに伴うルール・体制の課題 ⇒社会インフラ全体の複雑性が増している
- ✓ サイバーセキュリティ人材不足に関する課題 ⇒どこまで育成すればいいのか？
- ✓ 関係機関における情報収集・情報共有に関する課題 ⇒言うほど簡単ではない。。。
- ✓ 関係各国との連携体制に関する課題 ⇒オリンピックだからこそ協力を仰ぐべき
- ✓ グローバルに見ると、日本として**サイバーセキュリティの“経験値”が足りないのではないか？**

# 他の開催都市が有している経験値と日本に欠けているもの

- ✓ 基本的には、物理的なテロ・犯罪・政治的活動がサイバー区間に移行しているだけ。
  - ロンドン: 政治的プロテスト集団、アラブ・イスラム武装勢力
  - ソチ: イスラム武装勢力、国内分離独立勢力
  - リオデジャネイロ: 麻薬組織、マフィア
  - 平昌: 隣国との関係

✓ **実戦経験のない組織は、本番にはきわめて弱い。より実戦的な研修・演習を取り入れるとともにナレッジを蓄積する必要がある。**

### 3. 組織委員会のアプローチ



# 組織委員会がとるべきアプローチ

## アプローチ① リスク・アーキテクチャ(全体像)の把握

- ✓ 特定のシステムや情報を守るだけでは不十分。組織委員会の事業(ビジネス)である大会のオペレーション(事業継続性)やレピュテーションを守るという目標設定が必要。
- ✓ 複雑化したITシステムも含め、いろいろな要素が複雑に関連してくる大会運営のリスクを洗い出そうとすると、**経験則だけに頼っていても限界がある。基本に立ち返った検討が必要。**

## アプローチ② 関係機関との連携

- ✓ リスク全体像を把握し、管理するためには、関係業界、行政機関、国際機関、近隣諸国などとの連携が必要。

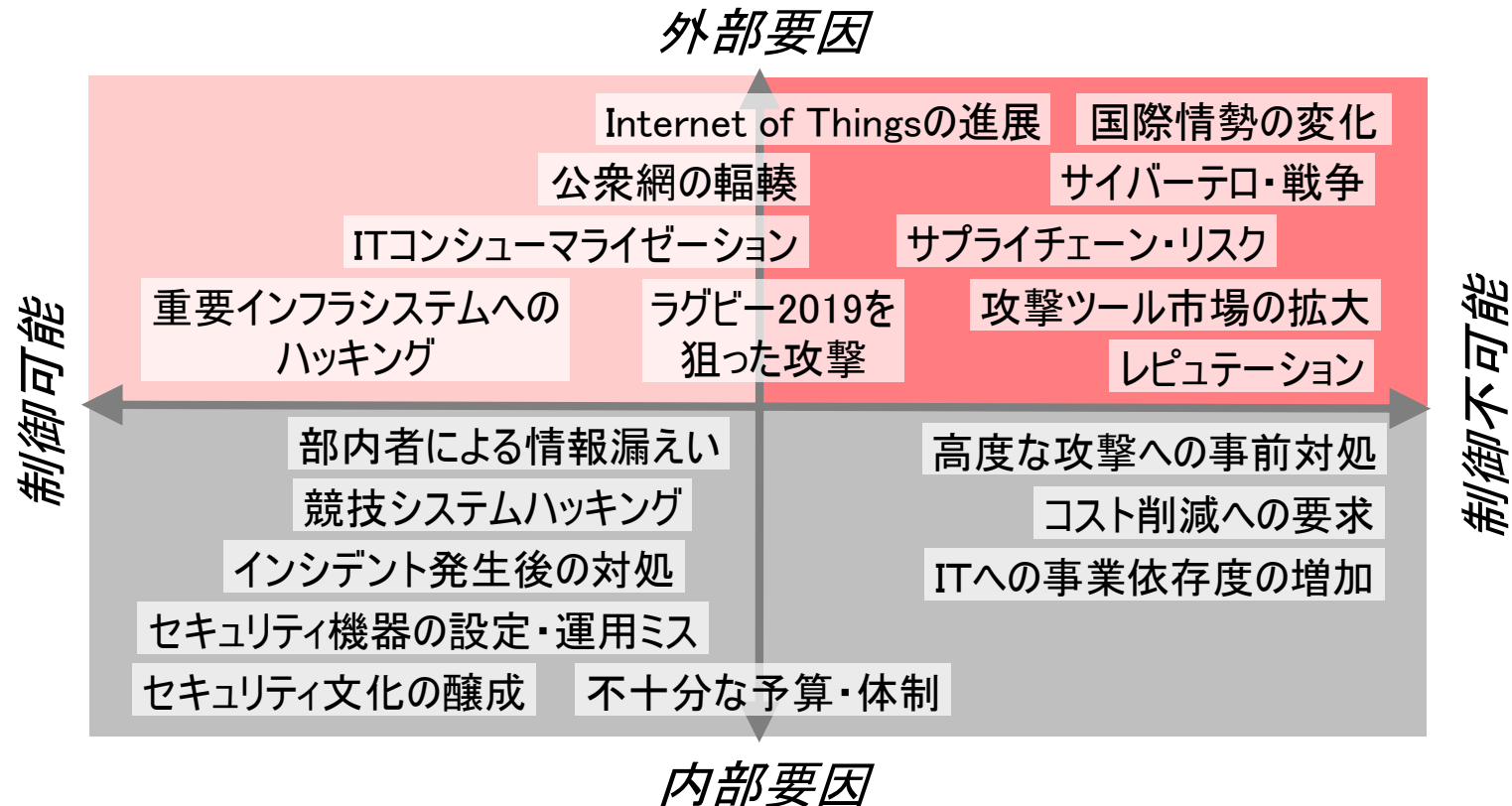


# ① リスク・アーキテクチャ(全体像)の把握

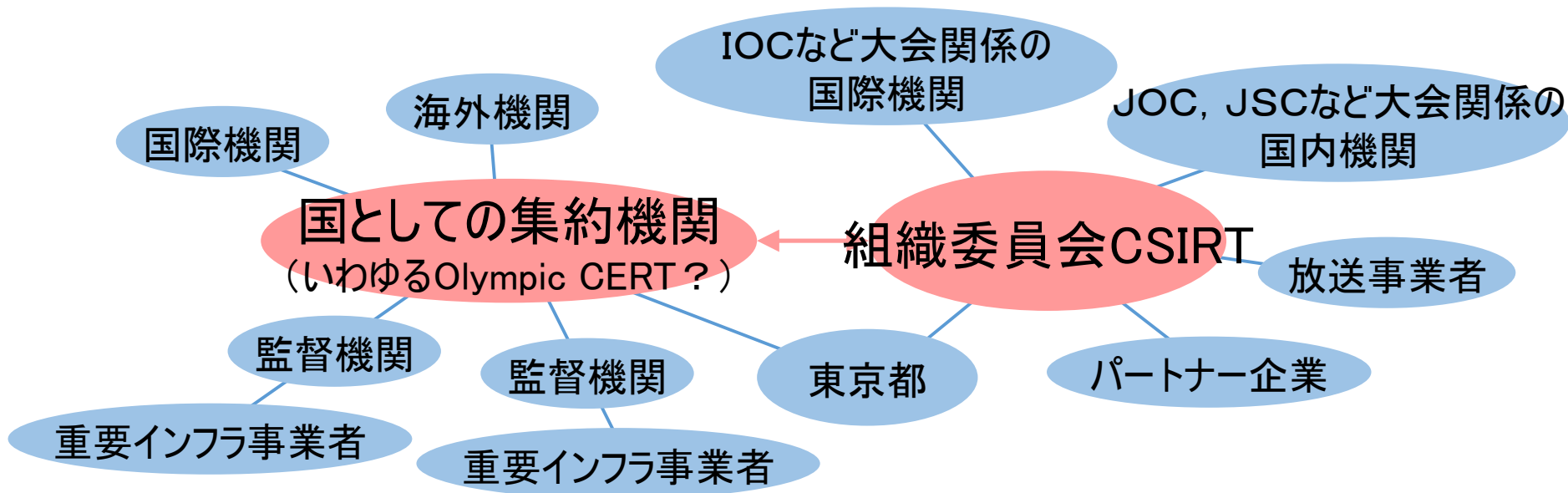
- ✓ ISO22320(緊急事態管理—危機対応に関する要求事項)に則った方法論により、大会システム・ネットワーク全体に内在するリスクを洗い出す共同作業が必要。
- ✓ 「攻撃者目線での抜け穴探し」、「複合的要因が重なることにより影響が格段に大きくなるケース」、などがリスク洗い出しのポイント。

# リスク・アーキテクチャに基づくPDCA

- ✓ 大会運営への影響度評価／対策を実施する(しない)の判断  
／上位組織へのエスカレーション／大規模かつ高度な演習  
シナリオ策定と実施／各機関における業務へのフィードバック、など



## アプローチ② 関係機関との連携



- ✓ “連携”は図に書いて指示するだけでは進まない。
- ✓ 相手の“顔”や“力量”が見えていること、個人間の“信頼関係”があること、がいざという時に連携が機能する必要条件。

# 関係機関との連携に関する課題

## 【課題1＝目標（想定する脅威）の共有】

- ✓ 迅速な情報共有を実現するためにも、「大会運営への影響を回避する」「国／自治体／スポンサー企業のレピュテーションを守る」といった個別具体的な目標の共有が重要。

## 【課題2＝複雑系におけるガバナンス構築】

- ✓ クラウドサービス・BPOが多用される環境において、関連システム・インフラ全体の情報セキュリティ管理／事業継続性の確保／インシデント発生時の迅速な情報共有・対処などのガバナンスをどう実現するか？

## 【課題3＝“情報”だけでなく“ナレッジ”の共有】

- ✓ 情報共有基盤の整備とともに、蓄積された情報をもとにナレッジ（動向分析、過去データ参照など）として活用すべき。

# 大会運営に向けて求められるサイバー人材

- ✓ 情報セキュリティ対策とサイバー犯罪対策（攻撃予兆分析、犯罪未然防止、フォレンジック対策など）の両スキルを備える。
- ✓ 海外主要機関のキーメンバーと顔が見える信頼関係を持つ。（英語力・コミュニケーション力も重要）
- ✓ 大会時に発生するインシデントに対して迅速な判断・決断ができる。

## 4. IoT時代のサイバーセキュリティ人材



# 攻撃専門チームの必要性

- ✓ 関連するシステム全体の複雑性が増すにしたがい、すべてのリスクを洗い出す作業がますます難しくなっている。
  - 「穴を見つけてふさぐ」という終わりのない作業だけを繰り返しても、モチベーションが下がる、どこかで妥協したくなる。
- ✓ むしろ「新しい穴を見つける」「誰も気づかなかった抜け道を見つける」という“**クリエイティビティ**”が**重要**。
  - 特にIoTのような新しいインフラを対象とする際には、「守る」だけでなく、「攻める」ためのアイデア出しこそが近道。最初からすべての穴を見つける必要などない。
  - 取り組むべき課題は、「**組織をまたがって検討に必要な情報にアクセスできるような仕組み・権限**をいかに持たせるか?」、「**攻撃専門チームの知見**（組織にとって最重要機密情報）をいかにセキュアに管理・継承するか?」

# サイバーセキュリティのクリエイターとは？

- ✓ 現在のサイバーセキュリティの世界を作り上げた先達も、クリエイターだった。

## Brain (コンピュータウイルス)

BrainまたはBrain virusとは、パキスタン人の兄弟が作成した、極めて初期のコンピュータウイルスである。文献によっては最初のコンピュータウイルスと紹介されている。

このウイルスはフロッピーディスク内のブートセクタに寄生し、フロッピーディスクからシステムをコピーすることによって感染する。(中略) 作者はパキスタンでコンピュータの販売・メンテナンス、ソフトウェアの販売を行っていた会社を経営する兄弟であった。

**彼らは違法コピー対策として、違法コピーにより感染し、その感染ソフトを起動した場合に  
とあるメッセージを表示するようにしたプログラムを仕込んだ。**そのメッセージには著作権者でも  
あるウイルス製作者の名前と、会社名、連絡先が表示され、ウイルスに注意し、ワクチン接  
種が必要な場合は会社へ連絡するように書かれていた(すなわちウイルスと自ら名乗った)。  
(後略)

【出典】ウィキペディア [https://ja.wikipedia.org/wiki/Brain\\_\(コンピュータウイルス\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/Brain_(コンピュータウイルス))



# レガシーとしてのサイバー人材

- ✓ これまでの日本の社会では、サイバーセキュリティはほとんどの場合、コストでしかなかった。
  - いかにかコストを減らして“本業”に集中できるか、にしか興味がない人達がまだまだ大多数。
  - この認識で育成される人材とは、結局は“守ることができる人材”ではない。“たちごっこ”の構造はなにも変わらない。
- ✓ これからは、「だれも考え付かなかったITの活用方法」「攻撃者の目線になりきった完璧な防御方法」を実現して、**世界のハッカーと勝負できる“クリエイター”**が求められているのではないか。
  - このような人材が社会や組織のIT化を支えるポストにつき、競争力の源泉として活躍するような絵姿こそが、2020年のレガシーではないか。

# 最後に

- ✓ 国を挙げての一大イベントだからこそ、大会の直接の関係者（組織委員会、スポンサー企業など）だけががんばってもうまくいかない、限られた人々だけでやっても意味がない、というのはサイバーセキュリティにも当てはまります。
- ✓ 業界全体・社会全体（さらには近隣諸国も交えて）で、『大会・街・国を守っていく／サイバー総合力として一段のレベルアップを目指していく』という目的意識を醸成することが、『一番の対策／一番大事なレガシー』と考えます。